

真の笑顔の検出力における社会的排斥の影響

—日本人参加者を対象とした検討—

○門山怜奈・河村優衣・岩崎春花・中嶋智史

(広島修道大学健康科学部)

目的

Bernstein et al. (2008) は、社会的排斥経験の有無によって真の笑顔と偽の笑顔の識別能力がどのように変化するかを検討した。その結果、排斥条件では、他の条件に比べて動画の人物の表情が真の笑顔か偽の笑顔かを判断する成績が高かった。これは、仲間外れにされることで、他者が自分自身に対して本当に好意を抱いているかに敏感になるからと考えられている。

一方、Yuki, M. et al. (2007) は、表情の認知において、アメリカ人は口、日本人は目により着目するという文化差を報告している。Bernstein et al. (2008) の実験ではアメリカ人を対象としており、日本人でも同様の結果が見られるかは検討の余地がある。したがって本研究では、日本人を対象として Bernstein et al. (2008) の追試を行った。

方法

実験計画 1 要因 3 水準（排斥・受容・統制）の参加者間計画で実施した。

参加者 29 名（男性 7 名、女性 22 名、平均年齢 18.72 歳 ($SD=4.70$)) のデータを分析対象とした。内訳は以下の通りであった（排斥条件：9 名、受容条件：10 名、統制条件：10 名）。

動画刺激 日本人男性 1 名、女性 9 名の計 10 名の大学生をモデルに表情動画を作成した。動画の撮影は背景が白に統一され調光された簡易スタジオ内で行い、モデルが PC 画面上で 40 秒の面白い動画 3 本を見ている際の真（自然体）の笑顔とつまらない動画 3 本を見ている際の偽（演技）の笑顔を PC に備え付けた Web カメラで撮影した。教示の際、真の笑顔条件では「動画を見て評価をしてもらいます」とだけ伝え、偽の笑顔条件では「面白い動画を見ているような表情をしながら見てください」と教示した。撮影した動画を編集し真顔から笑顔になる 1 本 4 秒の動画を真の笑顔と偽の笑顔でそれぞれ作成し、選定の結果、各表情 8 本ずつ用意した。

手続き まず参加者に各条件に則した内容（排斥：仲間はずれ、受容：仲間に入れてもらった、統制：今日の朝の出来事）の経験について自由記

述で回答させ、集団への所属欲求に関する尺度に回答してもらった。その後、PC 画面上で動画刺激を呈示した。参加者には各刺激を 4 秒呈示した直後にその表情の真偽を 2 択で判断してもらった。

分析方法 所属欲求の各項目に条件間で差があるか分散分析を行った。次に、ヒット率と誤警報率から条件ごとの弁別力 (d') を算出し、分散分析を実施した。また、所属欲求の各項目と各条件の弁別力との相関分析を行った。

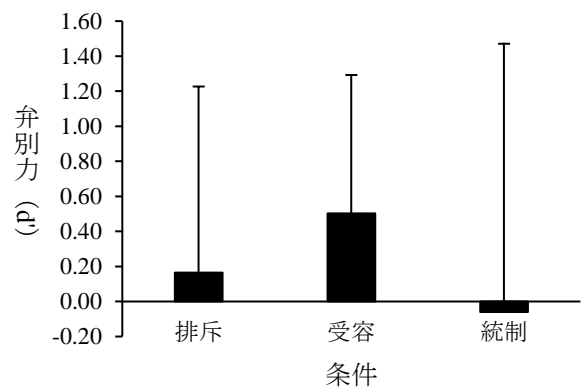


Figure 1. 各条件における弁別力の平均値。

結果と考察

所属欲求の各項目を従属変数とした 1 要因 3 水準の分散分析を実施した結果、所属感のみで有意差が見られ ($F(2, 26) = 5.61, p < .05$)、受容が排斥より所属感が高かった。

d' を従属変数とした 1 要因 3 水準の分散分析を実施した結果、条件間で有意な差は得られなかった ($F(2, 26) = 0.18, ns.$)。また、それぞれの項目で各条件の d' との相関は見られなかった。したがって先行研究の結果は再現されなかった。

結果の理由の 1 つとして、アメリカ人と日本人との文化差が挙げられる。2 つ目として、作成した偽の笑顔の刺激人物の笑顔表出が巧妙であり、真の笑顔との区別が難しすぎた可能性がある。

無相関検定で有意ではなかったものの、排斥条件でのみ集団への所属感を高く感じていた人は成績が高い傾向にあった ($r = 0.46$) ため、排斥されても集団に所属し続けるために、他者の表情に対して敏感になり弁別力が上がると考えられる。